



Title	Interface humanities 02
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13108
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文科学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



方法か「名人芸」か？

感覚について
対話するということ

高橋綾

「絵についての対話」は何もめずらしいことではない。豊富な知識を持つ学芸員が、観客の素朴な感想をうまく拾い上げ、美学的見方へと導いてくれるギャラリートークや、「心の専門家」が絵について話すことの中に、知らないうちに引がかかっている過去の経験を見つけてくれるセラピー。こうした専門家なしに「普通の」市民や学生とともに絵や写真について対話するということが、臨床哲学のひとつの試みとして行われている。

対話は次のように進められる。まず参加者に一枚の絵を見せ、そしてその絵について「知っていること」とや「思い出した過去の経験」を述べるのではなく、今日の前の絵を見ることで感じたことをできるだけ丁寧に言葉に置き換えてもらう。それぞれの言葉は書き留められ、参加者全員がいつでも見ることのできる場所に言葉のリストとして集められる。次にそれぞれの参加者は他の参加者が発した言葉に注目し、それらの言葉を通して絵を見ようと努める。この時点で何か新しい発見があれば、それも書きとめ、言葉のリストに加えてもかまわない。対話をうまく演じるには、ふたつのコツがある。ひとつは「目の前にある絵から決して離れないこと。」もうひとつは「他人の言葉を通して絵を見直してみること。」

多くの場合、私たちは絵についてなにか語ろうと

桃木 対象が歴史であつても、研究者は現場にいるのだ、研究者がその研究にあつた歴史を作っていくのだという考えかた自体は、かなり広く共有されてきました。それを全面的に肯定するような方向での言語論的転回という理論が流行したこともありま。また、マルクス主義なども、そういうことをある意味で積極的に肯定していたとも言えます。歴史学は現実を変革するといつわけです。この考えかた自体はかなり古いタイプの研究者でない限りは、かなり共有できていると思います。ただ、ではそれを方法としてどう錬磨していくかという議論になると、まだ歴史学においては何人かの名人芸にとどまっているというのが正直なところですよ。

渥美 私は「名人芸でいいんじゃないか」と言ったことがあります。名人芸だったことを反省して研究方法について書かれた本はいろいろありますけれど、どれもピンとこない。また方法として提示されると第一章からちゃんと学ぶ人があるけれど、最終章までいくとそれが身に付くかという点必ずしもそうではない。たとえば泳ぎの上手い人が書いた本を読んでも泳ぎが上手くならないというのに近い歯がゆさがある。そこで聞き直つて「名人芸でいいのではないか」という発言をしたところ、「何のトレーニングも受けずに名人然とした人が現場に来ては困る」という当然のお叱りを受けたりしました。どこまでをどうトレーニングすべきかという面が問題だと思っています。

「コメモレイション」

渥美 先日震災十周年をどうするのかという機会に出ました。十周年は五十周年とは随分違います。まだついこのあいたのことですし、それを将来学んでほしいと思う子どもたちもその出来事を直接知っているかいないかという年齢です。つまり十周年にどのような意味づけをすればよいのか、またそこから振り返った十年間をどう書いていけば良いのか、何の名案もないのです。生き残った私たちは被災した辛さや救援したこと何かが問題点であったかを伝えていけるのですが、亡くなってしまう方については、碑がたくさんできていて、「コ・メモリアル」なものがいっぱいある。そこから何を考え伝えていけばよいのか。そこで十周年イベントとしてシンポジウムなどをやるだけではちよつとまずいなという気がします。出来事がどのように回収されていくのかということがやはり問題です。

阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏巳 編

「記憶のかたち―コメモレイションの文化史」 柏書房、一九九九年。

「我々」は公共の記憶という枠組みの中で自分たちの共同性を想像する。会ったことさえない者たちが、同じ過去を共有するものとして一体感や連帯感を獲得するわけである。コメモレイションにはこうして一体感や連帯感を演出する有力な手段となる。」

すると、ついつい目の前の絵の経験を離れて、絵について「知っていること」について語ってしまう。しかしこれでは絵の経験についての対話を離れた、絵についての「知識比べ」という別のゲームになってしまう。

別の疑問もあるかもしれない。絵から感じたことだけを他人と話してなにが生まれるのだろうか。あるいは感覚について対話したり、他人の感覚を「理解」することなど可能なか。こうした感覚と「理解」の断絶を埋める手がかり、それは「言葉」にある。他人の言葉をたずさえて、絵にもういちど戻ってみる。他人が絵の中のどこに目を留め、その言葉を出したのか、それを見つけていく。他人の感覚を「理解」すること、それは他人の言葉を通して絵を見直す、他人の出した言葉と絵の関係を理解するというシンプルなことである。

ところが、いざやってみると、言葉のレベルで他人の感覚とかかわるといふこのシンプルなことが意外に難しい。他人の感覚に言及することへのためらい、また自分の言葉が自分の皮膚そのものであるかのように、自分の言葉に言及されたり比較されたりすることが、自分自身が傷つけられ、否定されることであるかのように感じる人も少なくない。「いろいろな感じ方があるのがわかって面白かった」という一見ポジティブにみえる反応のなかに「他人には他人の感じ方があるのはわかった、私には私の感じ方があるのだから、そこには踏み込まないで欲しい」という、対話を根本から否定するような抵抗を感じることもある。感じたことは私の「プライベート」な経験であるという思いこみ、それを言葉という平面で扱ふことへのとまどいや違和感からも私たちはなかなか自由になることができないようである。

プライベートな感覚と公共の場で話しあわれる価値のある問題。私の感じたことはすべてプライベートなこととして囲い込んでしまうとしたら、その外側にある公に話し合われる価値のある問題と一体どういふものになるのだろうか。

こうした二者択一の間で置いていかれてしまった様々な問題が私たちの身の回りには存在する。たとえば、ジェンダーや身体的美醜について。女らしさ／男らしさとは何か、身体の美しさとは何か。あるいは街づくりや景観をめぐる。街の真ん中に有名なアーティストが作ったという理由だけで置かれたオブジェは、その街で暮らす人にとっていったいどんな意味があるのだろうか。他人の身体や行為から、あるいは街やそこにある物から私たちが「感じる」ことというのは、社会的な問題であるにもかかわらず、それについて話し合われることはあまりない。そもそもなぜ小中学校では、音楽や絵についての正しい「見方」「聴き方」を教えてくれるだけで、音楽や絵を見て感じたことについて生徒同士が対話するというレッスンがないのだろうか。

感覚をめぐる対話には、答えはなく、専門家も存在しない。

出された言葉を通じて、絵についての新しい感覚が生まれ、自分の経験や知覚が「変わっていく」ということ。本来対話に必要なのは、専門的知識や言葉を扱う巧みさ、論理の厳密さではなく、言葉を媒介にして自分の知覚や感覚が変容するという経験なのではないだろうか。もちろん「変化」は常に「良い」ものであるとは限らず、また一回の対話で決定的な答えが出ることはないだろう。けれども一度きりの対話で答えを出す必要はなく、ひとつの対話の成果を別の対話につなげ、そのなかで問い返していくことが大切だと私たちは考えている。素晴らしい芸術作品は、見る者をひきつけ、新たな感覚を呼び起こす。そんな作品の力を借りて、こうした感覚についての対話の場を開いてゆけたらと思う。

実際の対話で用いられた奈良美智氏の作品。
作品の喚起力のおかげで参加者からは次々に
ユニークな意見が飛び出した。



© 2003, Yoshitomo Nara, by courtesy of 小山登美夫ギャラリー

「聴き取り」場面の不自然さ

渥美 ある人の語りを聴き取るという場面を私は素外不自然だと思っています。聴きたい人がやってきて、さあどうぞとなるわけですが、これはどこかおかしいところがある。たとえば私の学生に神戸に住んでいる者がいます、彼と話すときに「あの日は寒かったね」という時の「あの日」は一月十七日のことと当たり前前に決まっていることなんですね。そういうことの方が語りの中心を捉えているように思います。

桃木 歴史学も最近になって聴き取りに取り組みようになり、たとえばベトナムの村で聴き取りをするにしても、セッティングされた一回の聴き取りでは不十分だということと分かります。われわれもある村を十年間ずっと調査するということをやっていて、いろいろな人がその村に入っています。年々いろいろな課題が出てくるのですが、文献と突き合わせながら執念深く調べると、最初の調査で語られたことはまったく違っていたということもだんだん分かってくるわけです。

渥美 第一回のインタビューでそう答えたということは、記憶が間違っていたというよりも、一番最初に会った人に語りやすい語りだったということかもしれないですね。そのズレはどう解釈されるわけですか？

桃木 先ほどの例では、客観的に調べられる数字的な部分も含めて不正確だったのですが、たとえば聴き取りの対象にそれぞれにウチとソトというのがありますし、言語の問題、紹介者が誰か、最終的には対象の個性もある。去年の聴き取りではオフィシャルな語りを押しつけられるということもありました。その事柄に応じて、語りの中で向こうが作り上げていくということも当然あります。



フィールドの
さわめき

ホストと学生との はざまで

木島由晶

ホストクラブでフィールドワークをはじめて二年になる。些細な疑問がきっかけでこの調査をはじめた。キャバレーやナイトクラブ、風俗店などがひしめきあう歓楽街は、私たちの身近な社会的世界のひとつであると同時に、海外にも類をみない独特の文化を形成している。また、おもに異性を相手におこなわれる「水商売」の接客は、ジェンダーやセクシャリテイの問題とも密接に関連している。けれどもどうしたわけか、社会学の調査研究のなかで「水商売」は一種の空白地帯だった。私はそれを調査することで、ただ研究の穴を埋めるだけでなく、「夜の世界」に興味を抱く、さまざまな人びとの関心にも応えることができると思ったのだ。

二〇〇一年の冬。対象とするフィールドのことを理解するには、そのフィールドに溶けこむのが一番、という古くからの教えどおり、私はまず、ホストクラブで一定期間、従業員として働こうと考えた。

タイガース優勝という出来事

桃木 歴史をもう少し広く捉えるというときに、出来事が必要とされる。それがどういう風に作られるか、語られるかをもっと考えなければならぬ。そういったことを一番強烈に思ったきっかけは一九八五年のタイガースの優勝です。あのときにジャイアンツ戦で、掛布、バース、岡田のバックスクリーン三連発という「出来事」があった。これは、タイガースにとってのみならず、やられた側にとっても「トラウマ」としてある種何か強烈な出来事であった。そしてこのトラウマからの回復への動きがまた歴史を動かしているのではないか。

分かりやすい例としてはベトナム戦争でひどい目にあつたアメリカが、この間イラクでやっているのはまさにそういうことだと捉えることができる。ですから、かなり広い範囲で歴史学の対象として出来事をもっと考えるべきだと思っています。ベトナム戦争でも実際の被害はベトナムの方が大きいわけですが、黄金の出来事としては、アメリカがやつつけられたということで、それなしには語り成り立たない。

就職情報誌で目ぼしいホストクラブをチェックしては面接にでかけ、実際にその店で一日体験入店させてもらうという作業をくり返した。いくつかの店を転々とした後、私が腰をすえることに決めたのは、関西随一の売上をほこる、業界屈指の有名店だった。結局、この店ではのべ半年間ほど働いたが、現在でもこの店にはなにかとお世話になり続けている。

今でこそ、気軽に店にも立ち寄れるようになったものの、当時は面接に行くだけで、それはもう不安で仕方がなかった。研究目的で働くことを、はたして面接担当者は許可してくれるだろうか、目障りな奴だと思われはしないだろうか、そんなことばかり考えていた。やつとの思いで面接の予定を取りつけ、店のすぐ目の前にまでたどり着いても、なかなかそこから的一步が踏みだせず、意味もなく、何度も店と商店街とのあいだを往復したりした。しかし実際に面接を受けてみると、そんな心配は一切無用だった。どこの店でも、きまつて快く受け入れてくれた。ただしそれは、残念ながら私が担当者に好まれたからではない。理由は簡単で、要するにホストクラブというところは、慢性的に人手不足だったのである。

どうして人手が足りなくなるのかという疑問は、実際に雇われてみると即座に氷解した。すなわち、あまりにも仕事が大変なので、「割に合わない」と考えた従業員がつきつき店を辞めていくのである。ところが、どうやら世間一般にはホストは「楽して儲ける」仕事と理解されているらしく、不幸にして職を失った中年男性や、やんちゃ盛りの若者たちが、連日ホストクラブの門を叩きにやってくる。店にし



てみれば「来る者は拒まず、去る者は追わず」でも、残る従業員は自然に淘汰されていくというわけだ。だから当時の私も、面接担当者の目には「その場しのぎの労働力」としか映らなかつたらしい。さすがに慧眼である。

ともかく、こうして私は難なく従業員として働く許可をえたのだが、その仕事の辛さは私の想像以上だった。なかでも、不健康な生活と毎日の飲酒には、本当に苦しめられた。ただでさえ夜型の生活を送っているのに、ホストは酒を飲むのが仕事である。

ほどなく私は、慢性の不眠症とアルコール依存の自覚症状を覚えるようになった。そのうえ、意外なことに、夜が明けてもホストの仕事は明けなかつた。日中は、客との接待の時間（これをホスト業界では「営業」と呼ぶ）で埋まっていたからだ。ある熟練ホストは「ホストの一年は一般サラリーマンの三年と同じ」と語ってくれたが、私にとってもホストの生活は、学生登山隊の一員として、アラスカのマッキンリー峰に遠征したときと同じくらいハードだった。

こうした仕事の大変さは、皮肉なことに、私の研究活動にも影響を与えた。もともと「ホスト」と「大学院生」という二足のわらじを履いて生活するつもりでいたから、当然、平日の昼間は「営業」の予定を入れていない。だが、千鳥足で大学のゼミに出席するのはさすがに気が引けたし、それ以前に、徹夜続きで衰弱した体が大学に行くことを拒んだ。閉店後に店のソファで眠り、起きるとそのまま店で働くという合宿のような毎日が続いた。また、従業員がころころ入れ替わるので、ラポールの形成もままならなかつた。そのぶん私は、どんなタイプの従業員ともすぐに打ち解けられるよう努めた。髪を染め、パーマをあて、ピアスをあけて舶来品のスーツに身を包んだ。車の改造や「ビジュアル系」の音楽、携帯ゲーム機の情報など、従業員の好む話題にも必死になつてついていった。しかしながら、そうやってホストの生活になじめなむほど、私はますます大学の生活から遠のいていった。ようやく調査

をはじめると十分な環境が整ったときには、もはや自分は大学には戻れないのではないかと半ば真剣に悩むようになっていた。

こうして、二足のわらじを履くという私の当初のもくろみは、みるも無残についでた。従業員として雇われているあいだ、私はほとんど大学に通うことなく、ホストクラブでの参与観察に専念した。大学に通うのが学生の本分であるとするならば、それは明らかによくないことであるに違いない。しかしそれでも私は、今でもホストの生活に両足を突っ込んでよかったと感じている。「水商売」のフィールドワークは、時間的、肉体的な困難をともしも私が学生でなかつたなら、働きながら観察することなど到底できなかったろう。つまり私は、大学に通えなかつたからこそ、「水商売」の世界がどうい



う社会構造になっており、従業員と客とがどのような社会関係を形成しているかを深く知ることができたのだ。ホストから学生へと返り咲いた今、私はようやく研究のスタートラインに立てた気がする。

現場と現場をつなぐもの：「○○と言わない○○」

渥美 今、「子どもたちとの防災活動」というものにかかわっています。「防災」というと誰もが大事だと思うことですが、「防災活動を行ったか」というと、やっている人は必ずしも多くないように思います。そういう活動を子どもたちにとつ伝えていくのか。そこで子どもたちにカメラを持たせて「自分の街の再発見」探検をさせるのです。企画者側は消火栓の位置等は行事の前からかじめ調べておいて、参加する側は街の探検隊としてわれわれを連れて歩くわけです。そして公園などに行つて、子どもたちが防火水槽を発見する。それを写真にとつて、わが町マップを作るわけです。こちらがうまく誘導してやれば、「防災」という言葉を一回も使わずに、防災に関する知識が身に付くというプログラムを実施しています。現場でNPOとして活動しているスタッフにとっては「今日は遅れずに子どもたちが来てくれかな」とか、そういういったことが重要事項で、また、いろいろなところにお礼にいたりしています。そこで研究者がうまく距離を調整して、「防災と言わない防災」というフレーズにする。「防災」という言葉は他の言葉でもいいわけです。これを抽象化してみますと、「○○と言わない○○」。たとえば「人権と言わない人権」、「平和と言わない平和」と、自分の領域に落とし込んで具体化している。そういうサイクルがうまくいくと、現場の人が納得して、活動していただける。そういう意味で、研究者には抽象化する役割があるのかなと思います。われわれのひとつの距離のとりかたとして、ひとつのフレーズを編み出していくということがとても大切だと思います。

このプログラムの大事なところは、やはり専門家が必要だということなんです。事前に防災の専門家、消防署に教えてもらうわけです。そこまでは旧来のやりかたで充分ですが、次のプログラムに落とし込むときに、現場の面白さをいかに組み込むかということがチェックポイントです。子どもたちが集まると何かするときに、こういうことをすると楽しんでくれるという、えも言われぬものをちゃんと知っていることが大切。それを別の現場に伝えていくというのがわれわれの作業であり、それが次の運動につながるのだと思います。

木島由晶(きしま よしあき)

一九七五年生まれ

大阪大学大学院人間科学・研究科博士後期課程在籍
社会環境学講座に所属、専攻は文化社会学
日本学術振興会特別研究員



人文学の
フロンティア

イギリス小説の起源と 『ロビンソン・クルーソー』

服部典之

〈小説〉の英語はノベル (novel) であり、それは「物珍しいもの」という意味である。そもそも文学のなかでは新参者であるジャンルの〈小説〉は、様々な要素が流入した雑多なものであつて、そこに「物珍しいもの」を次々に取り込んでいくわけだから、小説というジャンルは異種混交的で非正統的存在であるのも、当然のことだと言えよう。

ある研究分野の最先端 (フロンティア) を研究する者は、その研究の起源にたいする深い洞察を持ち、起源と最先端を対話 (ダイアログ) させる努力が求められるというのが、私の持論である。イギリス十八世紀の文人ダニエル・デフォーは、商人であり、政治家であり、経済評論家であり、そして最後に文学者 (彼が最初のフィクション『ロビンソン・クルーソー』を書いたのは五十九才である) であった。イギリス小説の起源をどこに求めるかについては諸説紛々であるが、『ロビンソン・クルーソー』をひとつの原型と考えることに大きな異論はない。(イギリス小説) の起源に関わったデフォーがいわゆる純粋な「文学者」でなかったことは、当時「文学」のみで食べていけなかったという外的要因等を勘案しても興味深い事実である。(小説) の雑多性、異種混交性という特質を最初に述べたが、その起源に関与した

対談 ぼれ話 6

「おまえは当事者ではない」

三谷 たえばユダヤ人でないユダヤ研究者に対して、「ユダヤ人でもないのに本当に理解できるのか」という言葉が突きつけられた時に「では研究をやめます」とはなりません。しかし研究をつつげようとされるわれわれの根拠はどこにあるのかは、大きな問題になります。「ポランティア」というのは人文学のなかで特殊な位置にあり、大半の研究領域では何もかわりないところに踏み込んでいく作業になります。人文学をトータルに考えた場合、当事者でない人間は当事者性なるものをどうして引き受けていけばよいのでしょうか？

本間 文学的な当事者性とは何かということに関して言えば、文学には作者が存在するわけですが、作者はいわゆる当事者ではない。よく言われるように、書かれたものが文学作品になるためには作者が一読者にならなければならぬのです。またユダヤ文学が必ずしも特定のユダヤ人の宗教や習俗に対応するわけではないし、その場合の、ユダヤ的なものは現実世界のユダヤ人やユダヤ文化全体を指示しているのでもない。さらに人文学という平面で見た場合、出来事に関して問題になるのは、文学的

なものがわれわれに突きつける同じ「固有性」の問題、つまり、ある出来事に帰属する者としないう者としを弁別する、出来事の固有性の問題であると思います。

渥美 私は、自分が体験したことがどういふことなのかを結局説明がつかない。あの時に西宮にいて被災したので当事者だと言っているだけで、ましてや遺族の思いなど分かりませんし、どこまでが当事者なのかも説明がつかないままやつています。ただ、時代が違ったり、民族が違ったりという風な距離感はない……

桃木 歴史学の場合、おそらく外国研究や地域研究という別の問題がからんでくるわけですが、自分の国のコンテンポラリーな歴史も含めて、当事者に本当に「もうおまえは要らない」と言われたら、ゴメンナサイと言つて帰ってくるしかないと思つし、そうならないように努力します。ただこちらとしては、できればその両方がピンポイントすることによつてしか見えてこないこと、こちらも得たいものがあるし、僭越ながら当事者だけでは見えないことがあると言いたい。やはり出来事の抽象化、ある距離感から見えるもの——違う言い方をすれば、少し広いコンテクストにおいた方が見えてくるものがあるのではないのでしょうか？

ジャック・デリダ「シホレート・パウル・ツェフンのために」

飯吉・小林・守中訳、岩波書店、一九九〇年。

〈解説〉

Schubert, という言葉はこの発音の可能、不可能によつてその者を弁別し、共同体への帰属を確認するために課された言葉である。この書は「強制収容所」を体験したツェフンの詩をもとに、「日付とは何か」、「国境とは何か」、「ユダヤ人とは何か」、「割礼とは何か」といういくつかの問いをめぐりながら、あるもの「固有性」を画する境界線について思考している。

デフォーその人が異種混交の人生を送っていたことになる。

『ロビンソン・クルーソー』の序文（クルーソーなる漂流者の手記が編集されたという設定になっている）に、つぎのような言葉がある。「編集者は、この作品が事実を描いた正しい歴史だと信じる。また、ここには何ら架空（フィクション）らしいところはないのである。」イギリス小説の起源とされるこの『ロビンソン・クルーソー』という作品は、「事実」であり「歴史」なのだという。序文のなかで作品を解説するとき、「冒険」であるとか「物語」であるとか「宗教的教訓例」であるとか「歴史」であるとか複数の規定が混在していることも、小説の起源となる作品そのものが混沌としていることを物語るのであろう。

この作品の「小説的混沌」を表す例を挙げよう。クルーソーが孤島に漂着する第一日目の記述である。この場面は繰り返しの様な記述方法で描かれる。最初の記述では「私は、やつと無事岸に上陸し、天を見上げて自分の命が救われたことを神に感謝した」とあり、物語の進行に沿った普通の記述である。ところが、クルーソーが漂着した当初に日記を書いていたらこうなつたであろうという、仮想の日記という設定の記述がある。「九月三〇日、潮死を免れて岸に上陸した後、私は神に感謝することもせず、もう駄目だもう駄目だと叫びながら浜辺を走り回つた、と書いたであろう。」これは仮想日記である。しかし現実には書かれたとされる日記ではこうある。「一六五九年九月三〇日、哀れな私ロビンソン・クルーソーは、沖合で恐るべき嵐に遭遇し漂流し、この陰鬱なる不幸の島にたどり着いたのであった。」事実を列挙する「歴史」型記述である。ひとつの場面が別の記述方法によって何度も繰り返され、しかもその内容はその度に少しずつ異なってくる。このように様々な記述方法による異種の語りは、しかしながら不思議で重層的な力を持つて読者に迫ってくるのである。

『ロビンソン・クルーソー』の序文に戻ろう。ここでは、架空物語＝フィクションであるということが否定されていた。今テレビのドラマを見たり小説を読んだりすると、「この作品はフィクションであつて、何ら実在する出来事や人物とは関係がありません」

と断り書きがあるのが普通であるが、当時の小説（フィクション）は逆に「この作品は事実であり、歴史であつて、フィクションでは断じてありません」と書くのが通常であつた。フィクションとは「架空の物語」という意味と同時に「虚偽」をも表す言葉で、当時「虚偽」とはイデオロギーの反対陣営を糾弾する言葉であつたため、忌避された事情もここには絡んでいる。イデオロギーというからには、文学が同時代の政治の言説と深く絡んでいたことが理解できるだろう。かくして、十八世紀的文化状況とは、歴史、文学、ジャーナリズムなどが互いに軋みあい、絡み合い、相互浸食を繰り返し、かつ政治的言説と通底していたものであつた。

大学の人文学研究に（インターフェイス）が求められているという現状は、小説の起源の世紀である十八世紀の見地から見ても、極めて自然なことであると考えられる。もちろん、近代初期の雑多な混交と、現在進行中である様々な学問分野の「相互浸食・交渉」を同次元で捉えるのは不可能だという批判もあり得よう。しかし十八世紀イギリスが（近代）を作り出していくときの爆発的力、複数のメディアや言説や党派が衝突し合つて火花を散らすさまじいエネルギー、これらのことを当時の文献を読み研究することによつて実感するにつれ、現代は十八世紀的状况に回帰しているように思えてならないのだ。

服部典之（はつり・のりゆき）

一九五八年生まれ

大阪大学大学院文学研究科修士課程修了 文学博士（大阪大学）

和歌山大学などをへて大阪大学大学院文学研究科助教授

著書に、「風景の修辭学」（国土社）

《編集後記》

本間直樹さんに、ゲスト・エディターとして編集に参加してくださいとお願ひしたのは春先のこと、イラク戦争さなかの時期でした。特集のキーワードとして、「出来事」が浮かび上がったとき、それはインターフェイスの人文文学の一面を照射するものであるとともに、期せずして、現代世界のアクチュアリティに私たちが深くとらえこまれていることを痛感させるものとなったのです。そこからさらに、ニューズレターという紙媒体じたいが、読者を巻き込むひとつの「出来事」になつてほしいという私たちの願ひもまた生れました。ニューズレター2号を手にとるすべてのひとに、とまどいと驚きのひとときを過ごしていただければさいわいです。(M)

出来事について

今後考えざるべきこと？

桃木 たいへん大きな問題は、アジアで言うところの植民地体験ですね。ポストコロニアルスタディーズも流行ですが、植民地体験というものをどう歴史的に語っていくか、伝えていくかというところが大切です。当事者がまだ生きているケースもありますし、研究者自体も植民地官吏、反植民地運動をやっていた研究者などがいました。ほぼそういう世代が死に絶えつつありますので、これからどう研究していくか。いわゆるコンテンツポラリー・ヒストリーでない近代史をどう語るか。植民地に限らず、広い意味での近代をどう語り伝えていくかという問題意識がないまま、コンテンツポラリーな当事者との問題に集中すると自分の首をしめることになるかなとも思います。それはそれでやらなくてはいけないのだけだね。

渥美 今日議論できなかった問題としては、語り口という問題があります。教育、次の世代にどう伝えていくかカリキュラムを変えるという方法もありますが、その議論はできなかったかなと思います。

本間 私が課題として感じるのは、出来事が人を引き付けるのはなぜなのだろうということですね。共感という話がありました。反感も含めて、メディアを通じて、出来事をもっともっと広い視野で見るときに人々がそれをブラスカマイナスかでかわっていく、そういうレベルでの出来事とは何なのか。あるいは歴史—ベトナム戦争、アフガン戦争、イラク戦争という大きいスパンで見たとときの出来事自身の反復というものから見えてくるものを考える必要があるでしょう。

桃木 そういう意味では北朝鮮拉致事件等も今日のお話の中では課題になるだろうなと思います。

大阪大学21世紀COEプログラム
「インターフェイスの人文学」ニューズレター
Interface Humanities 02

発行＝「インターフェイスの人文学」研究開発委員会
編集長＝三谷研爾
編集＝本間直樹 金水敏 永田靖 山中浩司
ロゴデザイン＝奥村昭夫
編集協力・デザイン＝彩都メディアラボ株式会社
レイアウト＝西田優子 清水良介
印刷＝岡村印刷工業株式会社

発行日＝2003年8月10日

連絡先＝〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
大阪大学大学院文学研究科内
「インターフェイスの人文学」事務局
Phone: 06-6850-6716
Fax: 06-6850-6718
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

Osaka University
The 21st Century COE Program Newsletter
Interface Humanities 02

Published by COE Committee Interface Humanities
Chief editor: Kenji MITANI
Editors: Naoki HOMMA, Satoshi KINSUI,
Yasushi NAGATA, Hiroshi YAMANAKA
Logo Designer: Akio OKUMURA
Editorial advisor: Saito Media Lab Co., Ltd.
Layout: Yuko NISHIDA, Ryosuke SHIMIZU
Printed by Okamura Printing Industries Co., Ltd.

Published on August 10, 2003

Contact address: Interface Humanities Office
School of Letters, Osaka University
1-5 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka 560-8532
Phone: +81-6-6850-6716
Fax: +81-6-6850-6718
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

